

タイでの3年間を振り返って

バンコク日本人学校22年度派遣 山本 桃子（北海道）

1. はじめに

3年間のバンコクでの生活の中では、たくさんのタイの人に助けられ、たくさんのことを教えてもらい、生活してきたこの貴重な3年間。こうした海外で研修を行い、教育実践を行えたことは大変貴重な経験であり、以下、私がタイで経験したこと、感じたことを報告します。

2. 現地の概要

人口	6593万人（ASEANの中でインドネシア、フィリピン、ベトナムに次いで第4番目）
首都	バンコク（クルンテープ）人口828万人
民族	タイ族、そのほかカレン族、モン族、マレー族などの多数の少数民族
言語	タイ語
宗教	仏教徒95% イスラム教4%
政治体制	立憲君主制
元首	プーミポン国王
議会	上院150名 下院500名
通貨	バーツ（bath）

3. タイの気候

タイは北半球の熱帯に位置し、高温・多湿の気候です。季節は気候の特徴により、雨期と乾期に分けられています。乾期は更に寒季と暑季に分けられています。

雨期（5月～10月）

モンスーンの影響で激しい雷雨を伴ったスコールが降る日が多く、日ごろから交通渋滞が問題となっているが、スコールになると、交通渋滞はさらにひどくなります。

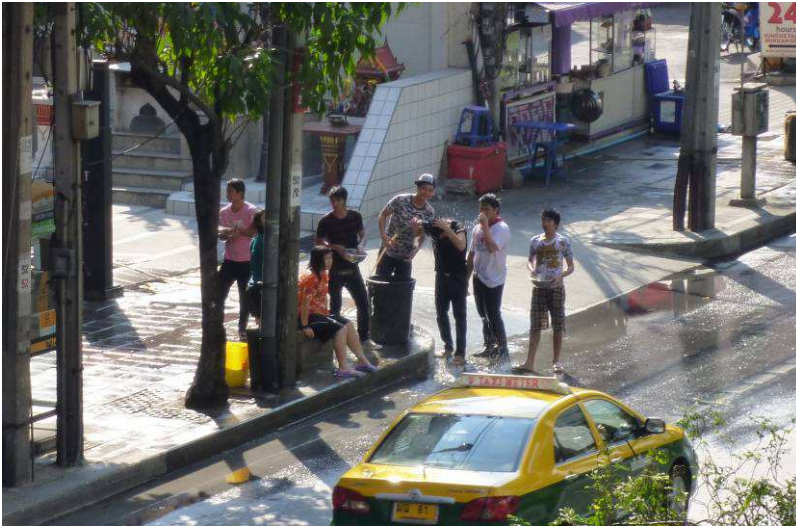
乾期（11月～4月）

乾燥したモンスーンの影響で、日中は30度前後になります。それでも熱帯のタイの中では比較的過ごしやすいシーズンであり、観光のベストシーズンです。

暑季（3月～4月）

1年で一番暑い時期である。35度を大きく超





えます。この時期に行われるのが、ソクランというお祭り。元々はタイのお正月を祝うためでしたが、現在は水掛祭りとも言われ、町中が水の掛け合いをしています。暑い時期だから怒る人もおらず、町中が祭りを楽しんでいます。

3. タイの宗教・習慣

タイの宗教

タイの国民の95%が仏教徒といわれています。日本と同じ仏教国であるが、タイは小乗仏教であり、生活に密着した戒律を守ればお釈迦様の教えが分かると信じられています。朝は僧侶が托鉢に町を歩き、多くの人が祈りをささげている姿が見られます。町中にきれいに装飾されたワット（寺）があり、コンドミニウムやアパートメントにも必ず小さな祠があることも特徴と言えます。また、会社や工場を開所する際は、僧侶を招いて儀式することが一般的になっています。

タイの祝日の多くは宗教的な意味合いをもち、多くの人おまいり



をしたりお祝いをしています。仏教に関わる祝日は月の動きで決まるため、年によって日が変わることも特徴です。

タイの王室

タイ国民すべてから尊敬されているのがタイ王室。町を歩くとどこにでも王室の肖像が掲げられています。駅や公共の施設では朝と夕方、国王賛歌が流れ、人々は足を止めて敬意を表しています。タイには王室不敬罪があり、侮辱する言動は罰せられます。

タイの食事情

タイの生活の中で日本と大きく違うと感じたことは食事でした。朝から人は屋台で食事をしたり、屋台で買ったものを家に持ち帰り、自宅で食べる。汁物でも麺類でも器用に袋に入れ、あっという間にテイクアウトしやすいようにしてくれます。家によっては台所が付いていないこともあるというタイの食事情。屋台の食事はどこでも安く、たいてい



は20パーツ（約60円）ぐらいから40パーツ（約120円）ぐらいでおいしい食事がとれます。

4. 日本とタイの関わり

日本とタイのかかわりは古く600年以上にさかのぼるといわれています。タイの首都バンコクから車で1時間半ほどのところにあるアユタヤには当時日本人街もあり、一万人近くの日本人が生活をしていました。タイの中で有名な日本人といえば山田長政。山田長政は江戸時代はじめに渡泰。タイで政治的な力を持つようになりタイで暗殺されたといわれています。

現在は日本とタイは経済的にも大きくかかわりをもち、日本にとってもタイは東南アジア地域における重要な生産拠点かつ市場であり、バンコク日本人商工会議所の加盟企業は1000社を超えるなどタイと日本の経済は緊密な相互依存関係を形成しています。日本にあるものはバンコクにはすべてある、といっても過言ではないほど充実しています。おかげで中学部で毎年行っていた職場体験も様々な企業に協力をいただき、充実した体験を行うことができます。

在タイ日本人会は今年100周年を迎え、日本とタイのつながりを一層強いものにしていきます。

5. タイの教育と泰日協会学校

タイの学校制度は日本と同じ6・3・3・4制を採用しています。多くの学校が2学期制で1学期は5月半ばから9月下旬、2学期は11月初めから3月中旬です。特にバンコクにはたくさんインターナショナルスクールも存在します。一番多いバンコクには83校ものインターナショナルスクールが存在し、生徒の多くはタイ人の恵まれた家庭の子女であり、英語を身につけさせるために通わせています。タイのインターナショナル校の1つに泰日協会学校があります。泰日協会学校は数ある日本人学校の中でも最も古く、歴史ある日本人学校といわれています。



1926年（大正15年）創立の盤谷日本尋常小学校で、1927年（昭和2年）からは盤谷日本国民学校と呼び名を変え、日本とタイの文化の融合と、両国の友好と福祉を推進することを目的とする日タイの友好・親善・協力団体です。日本企業の進出に伴い2013年現在在籍児童生徒数は2900人を超え、年々増加し続けています。

生徒のほとんどは登下校にスクールバスを利用し、スクールバスだけでも130台を超えるマンモス校となっています。

また、タイにはたくさんの学習塾、お稽古教室が存在します。日本の企業の進出と邦人の増加に伴い、日本人子女向けのお稽古教室や学習塾が増え続けています。学習塾では日本人学校のテスト対策、英検対策、個別指導など子供の目標に応じて塾を選べる環境が整っています。そのため、日本と同様にたくさんの児童生徒が放課後、学習塾に通う姿が見られます。お稽古教室では日本語でピアノなどの音楽教室、バレエやダンス、語学教室やパソコンなど習うことができ、多くの日本人が日本と同じように学ぶことができます。

6. 泰日協会学校と現地校について



① イスラム ムッサリム サンティ ムラニティ校

95パーセントが仏教といわれているタイで少数ではあるがイスラム教徒も生活をしています。現地校の視察としてタイ南部にあるサンティムラニティ校を訪問しました。そこはイスラム教の子女が通う学校で教師、生徒すべてがイスラム教を学び、イスラムの言語の授業も行われている学校です。

ここで13, 14歳の生徒に日本の伝統でもあるおりがみを使って母の日のカードを作成する授業を行いました。着任1年目の8月。タイ語はほとんど使えないなかでの授業でしたが、おりがみを作るのに大切な言葉を暗記し、子供たちに説明をしました。タイ語もろくに話せない日本人の登場に子供



たちは笑顔で迎え入れてくれたことが印象的でした。英語がわかる子が通訳をかって出る場面もありました。折り紙で作ったあじさいとさくら。「この花は日本ではいつごろ咲くのか?」「なぜこの花を選んだのか?」「日本のさくらの美しさは聞いたことがある」など作成しながらも質問が後を絶



たず、私の話すタイ語に熱心に耳を傾け、時に笑って教えてくれる、タイの中学生の優しさ、人懐っこさに心温まる時間でした。

② チュラロンコン大学附属中学校

泰日協会学校中学部では毎年チュラロンコン大学附属中学校と交流会を行っています。以前は中学部全校生徒で交流を行っていましたが、現在では中学部1年生とチュラロンコン大学附属中学校1年生との交流になっています。





チュラロンコン大学は「タイの東大」と言われる権威ある国立大学です。毎年交代でホスト校、ゲスト校を割り当て長きに渡り交流を続けています。交流の内容としてはスポーツ交流や互いの文化の違い知り合うための文化交流が行われています。ホスト校としてチュラロンコン大学附属中学校を迎えたときは日本の伝統である「書道」と「消しゴムはんこ」を作成

することにしました。

事前準備として通訳係を設定したり、どうやって伝えたらわかりやすいだろうと生徒たちは必死に考え、いざ当日。生徒たちは英語・ジェスチャーそしてタイ語を駆使して、タイの名前の日本語の書き方を伝えてました。また、スポーツ交流では協力してゴールを目指す3人4脚を行った。うち解けることができるとあつという間に「友達」になれる中学生。同じ国に住んでいても育ちや文化が違えば考えることも違う。しかし、その「違い」を楽しみ、「伝える」ことをやめなければ、文化や伝統が違ってても理解し合うことができるのではないかと感じました。

③ スコータイ芸術学校

修学旅行の中で訪問したのが、タイでもめずらしい伝統芸能を専門に学ぶ学校です。中学生から大学生ぐらいの年齢の生徒が真剣に伝統音楽を学んでいる学校です。初めに芸術学校の生徒による東南アジアに広く広がる物語から生まれた演目である仮面舞踊劇コーンの「ラーマキアン」を見せてもらいました。物語の内容を踊りと動きで伝えるのがタイの伝統芸能の1つ仮面舞踊劇コーンの特徴です。現在は普通の人が見ることができる仮面舞踊劇コーン。しかし昔は王室のための舞踊であったことや内容についても生徒たちは音楽の授業の中で学んでいたためか、生徒も私も食い入るように鑑賞することができました。自分たちと同じような年齢の生徒が自国の伝統に関わっていることを目の当たりにし、「自分たちはどうであろうか。」と考える姿も見られました。



訪問の後半は楽器ごとのグループに分かれ、1時間ほど共通の練習曲「ローイクラトン」の練習をしました。タイの古くから伝わる音楽であり、仏教儀式である「ローイクラトン」の時期に欠かさず歌われます。中学部でも授業の中でそのリズム、背景について学んだこともあり、多くの生徒が歌うこともできるほど親しみのある曲。西洋のものと違う楽譜が用いられていたり、音階が「ドレミファソラシド」に並んでいないことが大きな特徴でもあり、日本人学校の子供たちにとっては演奏するのが難しい楽器もありました。

たが、分かるタイ語の単語と動きで練習も悪戦苦闘しながら楽しく演奏していました。最後に全体で合奏をし、タイダンスも入り、にぎやかな演奏となりました。

タイの伝統楽器

キム	金属製の減を撥でたたいて鳴らす。
ソードゥアン	2弦の弦楽器で2胡に似ている。演奏は難しい。
コーンウォンレック	円形に配置された小さな銅鑼をたたいて演奏する。
アングルン	竹製で、ゆすって音を出す。ハンドベルのように調整した楽器をいくつも使って演奏する。
ラナートエーク	鍵盤は硬木で作られ、高音のシロフォンに似た楽器。



スコータイの芸術学校では芸を身につける大変さや、伝統を守るということに対する心構えを若い生徒たちから感じました。伝統を引き継ぐことは大変であり、細かなところまで気を配りながら丁寧に楽器を演奏する姿が印象的でした。伝統楽器を尊び、「楽器をまたいではいけない。」や「取り扱いは十分に気をつけ、丁寧に扱うこと」が当たり前に生徒に浸透しており、そうした思いからも伝統を守ることの誇りを感じることが

できました。何年もかけて練習し、タイの伝統音楽を受け継ごうとする多くの若者がいることに、驚くとともに頼もしく思えました。

④ 山岳少数民族の学校

それまでいったタイの学校とは違い、山岳少数民族の学校は私が日本で勤務していた学校のように地域で子どもたちを育てている雰囲気のある小さな学校。

訪問先のバーンムースー校と日本人学校は実に30年に渡って交流を続けていました。お互いの学校を尊重し、毎年自分たちが大切にしてきた文化を紹介し、家族を紹介し、地域を紹介してくれました。



タイに住む山岳民族は数多く存在するが、一番多く住んでいるのはカレン族（約35万人）です。そのほか、モン族、ラフ族、アカ族、と続き、多くの少数民族が生活しています。それぞれに民族衣装があり、お祭りやお祝いの時はそれぞれの衣装を着ています。今回は日本人を迎えるということで民族衣装で出迎えてくれました。共通語として学校ではタイ語で授業がされていました。そうしたたくさんの民族の



子ども達が独自の文化をもちながらも、共に生活することで、他文化を上手に受け入れることができる民族であるという印象を受けました。それぞれの山岳少数民族の衣装を身につけ交流するため、一目で民族の違いがわかり、民族衣装からも交流のきっかけとなりました。民族衣装を見ると日本の着物に近く、「帯」を使っているものもありました。村人は質素な暮らしをしながらも、遠い異国の日本人を家に招いてもてなし、

日ごろ食べている日本人にはめずらしい果物を取ってくれたり、村を案内してくれました。こうして続いたバーンムースー校と日本人学校の30年間の交流が2011年で終了してしまっことは非常に残念に思います。

小さな村で多くの民族が肩を寄せ合い、それぞれの民族衣装やその土地で培われてきた遊び、文化を大事に暮らしていること、助け合いながら生きていることが実感することができました。

7・最後に

3年間、たくさんのタイの人と接する中で「違い」を楽しみ、「知らせあうこと」の大切さを肌で感じる事ができたことが大きな収穫でした。それぞれの学校と交流をもつことは両校にとっても意義のあることであると実感しました。今後も交流を深めることで、純粋な〔人〕と〔人〕との触れ合う機会の充実を図っていきたいとおもう。